



希望のひかり

第3回

市が東北誘致に取り組んでいる「国際リニアコライダー（以下、ILC）計画」について最新情報を隔月連載します。

ILCを核とした東北の将来ビジョンの公表

第2回では、県が提案した「TOHOKU国際科学技術研究特区」についてお知らせしましたが、今回は、東北ILC推進協議会（東北加速器基礎科学研究会から改組）が7月10日の総会で発表した「東日本大震災からの復興に向けて——ILCを核とした東北の将来ビジョン」の一部をご紹介します。

このビジョンは、ILCの建設地選定が大詰めに差し掛かっていることから、東北の震災復興と再生の原動力となる北上山地へのILC建設について理解を深め、プロジェクトの実現を目指そうと策定されたものです。東北の地が基礎物理実験の場としてばかりではなく、世界との交流の場、技術革新の場として力を発揮し、東北の再生と復興につながる

ことが期待されています。ビジョンには、ILCを核として東北を先導する場所として、科学、技術、情報、交流、生活の5つの条件を備える『国際科学技術研究圏域』が示されています。

国際科学技術研究圏域

国際科学技術研究圏域は、中核研究拠点の約15キロから20キロ圏である「中心範囲」と、その機能を補完する役割を担う盛岡から仙台あたりまでの「中域交流範囲」、科学技術面で連携が可能な東北全域と新潟県までを範囲とする「広域連携範囲」の3つの階層で構成されています。

「中心範囲」とは

中心範囲は、「最先端科学技術エリア」と「国際交流生活エリア」の2つのエリアで構成され、「中核研

究拠点」から自動車移動30分～40分程度の範囲を想定しています（右ページ下図参照）。北上高地を含む中心範囲は、国際科学技術研究圏域の機能・空間両面で、中心的な役割を担います。

■最先端科学技術エリア

次の3つの拠点で構成されます。①中核研究拠点

新設予定のILC国際研究所や参加研究機関をはじめとする研究・管理機能がまとめられた「メインキャンパス」で、世界最高水準の先端科学技術の研究が行われる場所です。

研究者や職員の通勤と生活利便性を考慮し、既存市街地や、新幹線の駅、高速道路インターチェンジに比較的近い空間に形成します。研究機関などの立地需要の増加に応じて段階的に整備され、最終的には1000畝程の面積になると想定されています。

②計測実験拠点

ILCの素粒子衝突点の地下および地上に構築する実験設備がある場所、メインキャンパスに対し「サテライトキャンパス」と呼ばれる場所です。地上部には、ILC測定器オペレーションセンター、ILC国

※サテライト＝衛星の意味

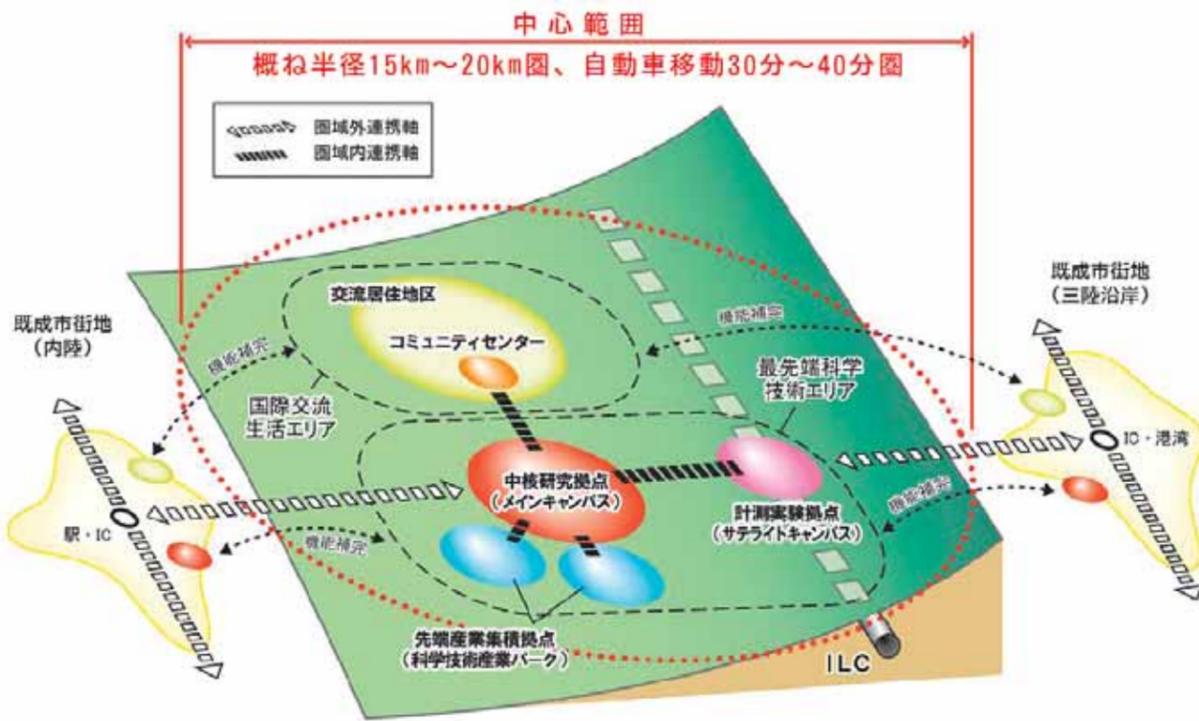


メインキャンパスのイメージ（出典：㈱野村総合研究所作成、福山コンサルタント協力）

際研究所、参加研究機関の出先オフィスなどの建設を想定しています。③先端産業集積拠点

ILCに使われる基礎科学技術と関連する先端技術産業が融合することによって、基礎・応用研究開発や

■図 「中心範囲」の拠点・地区の配置イメージ（出典：㈱野村総合研究所作成）



ベンチャー企業の創出などを行う場所「科学技術産業パーク」です。シンボル性や社会基盤の効率的利用、企業従事者の利便性を考えて、中核研究拠点の周囲で幹線交通ネットワークにも比較的近い空間に形成します。

■国際交流生活エリア

さまざまな国の研究者らが生活する場所「国際交流生活エリア」は、『交流居住地区』と『コミュニティセンター』の2つの拠点で構成されます。

①交流居住地区

ILC国際研究所の職員や参加研究機関の研究者、およびその家族などが住む場所です。「人間性の重視、自然との融合、ゆとりの創出」を理念としています。研究者や職員の利便性に配慮し、中核研究拠点へ車で30分の圏内とし、周辺都市の市街地に近い地域に形成します。

②コミュニティセンター

さまざまな国籍や文化も持つ人々に、国際レベルの医療、育児、教育、文化、情報、スポーツ・レクリエーションなどの生活サービスを提供する場です。

「国際リニアコライダー計画推進」講演会

いわてILC加速器科学推進会議では、今回紹介した「将来ビジョン」を執筆した北村倫夫氏と、都市計画の権威である大村慶一氏の講演会を開催します。

■日時 8月25日(土)午後1時～4時

■場所 II市文化会館（Zホール）

■演題 II「ILCを核とした東北の将来ビジョンについて」北村倫夫氏（㈱野村総合研究所）、北上高地国際学術都市 大村慶一氏（元東北大学大学院教授）

■参加費 無料

■問い合わせ いわてILC加速器科学推進会議事務局（奥州宇宙遊学館内）2020

研究者・職員、またその家族全てが利用することから、「中核研究拠点」と「交流居住地区」のどちらからも利用しやすい場所に形成します。今回は、中心範囲の機能を補う「中域交流範囲」と「広域連携範囲」について紹介する予定です。